

佐藤成広作 「創造性」

効果音 (道路を走る車)

岡田正男 6回の、若松の特大ホームランで決まったね。明日の朝は、ヤクルトでも飲むか。

木村孝 (正男と一緒に) いいい…。

孝 それじゃアまたな。明日、宿題の答え教えてもらいに行くからな。ヤクルトでも用意して待つてろよ。

正男 じゃあまた明日な。

効果音 (正男に車が突っ込み、クラクション、鈍い衝撃音)

孝 (駆け寄って) おい、正ちゃん、大丈夫か？ どこぶつかったんだ？ 平気か？

正男 び、病院へ…。

孝 そうか。病院、病院、どこかこの近くに病院あったかな？ えーと…あ、そうだ！ 救急車を呼ぼう。正ちゃん、そこでじっと待ってるんだぞ。

効果音 (公衆電話でダイヤル音)

孝 あ、もしもし、救急車お願いします。急いでください。正やんが死にそうなんです。…え？ えーと、東町2丁目の交差点のところですよ。…ええ、交通事故です。急いでください。出ないと正やんが…。

効果音 (救急車のサイレン)

ナレーション 正男と孝は、小学校のころからの親友。二人とも野球が好きで、この時も、ヤクルトー阪神戦を見に行ってきた帰りでした。正男君は、長い手術の末、やっと一命は取り留めたものの、脊髄の一部損傷で、手足が思いどおりに動かなくなってしまうました。

効果音 (病室のドアを開ける音)

孝 やあ、見舞いに来たぞ。お前、タフだなあ。よくあれで大丈夫だったじゃない。

正男 まあな。ヒマだったらゆっくりしていてもいいぞ。おれも今さっき目が覚めたばかりで、これから一日、何して過ごそうかと思っていたんだ。

孝 そんなことだろうと思って、ほら、(バッグを開ける)「少年マガジン」「少年チャンピオン」「少女フレンド」…。

正男 おい、漫画ばかりじゃないか。

孝 ところがそうじゃないんだな。下のほうには「若きウエルテルの悩み」「壁」「R62号の発明」「ドン松五郎の生活」などなど、各種取り揃えて、皆様のご利用をお待ちしております。

孝・正男 いいい…。

孝 それじゃア、ここに置いとくからさ。読みたくなったら、いつでも手に取れるだろ。

正男 すまないな。…それじゃあ、「若きウエルテルの悩み」でも読むとするか。

孝 ほんとは「少女フレンド」でも読みたいんじゃないのか？

正男 たまには文学青年になりたいじゃない。

孝・正男 いいい…。

正男(モノローグ) よいしょと(本を取ろうとする)あ、おれの、おれの手が…。チキショー！(必死に手を伸ばして本をつかみかえる息使い)いてえ！

効果音 (「ドサツ」と本を床に落としてしまう音)

孝 おい、どうしたんだ。

正男 済まんが、あっちへ行ってくれ。

孝 一体…。

正男 (どなる)いいから出ていってくれ！

正男(モノローグ)(エコー)一体どうしたんだろう？ おれの手なのに、おれの足なのに、おれの思いどおりにならない。無理に動かそうとすると背骨が痛む。おれは、もう一生こんな体で生活してゆかなければならないんだろうか？ もう好きな野球もできない。みんなと一緒に走り回ることもできない！（男泣きに泣く）

ナレーション 彼を襲った突然の事故は、彼の将来への希望を粉々に砕いてしまいました。彼は、だんだん無口になってゆき、孝がお見舞いに行っても知らんぷりをすることが多くなりました。そんなある日――。

効果音 (電車内)

孝(モノローグ) あ～あ。正男のやつ、今日も元気なかったな。なんとかして、あいつに生きる希望を持ってほしいんだけどな。でも、一体どうすりゃいいんだろう？ 困ったな…。

乗客A ねえねえ、あれ見て。とつてもすてきだわね。

乗客B うん、きれいだね。

乗客A あれ、筆を口にくわえて描<sup>か</sup>いたんですって。

乗客B 本当かい？ 僕なんか、五体満足なのに、こんなすばらしい絵、描けないな。

孝(モノローグ) これだ、これなんだ、あいつに必要なのは！

ナレーション 孝の目の前には、「身体障害者美術協会 絵画展 見てくれ！ 僕たちの生きる力を」と書かれたつり広告がありました。彼は次の日、その絵画展に行き、運よく出品者の一人と話をすることができました。

石田玲子 それで、あなたのお友達が無気力になってしまったの？

孝 そうなんです。それで、あなたなら、正やんの笑顔を取り戻す方法を知っているんじゃないかと思って…。

玲子 とにかく、会って話をしたいわ。明日の午後、行っていいかしら。

孝 正やんのところまで来てくれるんですか？ どうもありがとうございます。

ナレーション そんなわけで、二人は次の日、正男君のところへ見舞に行きました。

効果音 (ドアの開閉音。車イスの入る音)

孝 やあ正やん。調子はどうだい？ 今日はすばらしいお客様をお連れしたんだ。

玲子 初めまして。石田玲子です。

正男 車イスのお客様かい？ 一体おれに何の関係があるって言うんだよ！

玲子 あなたのこと、孝さんから聞きました。

正男 孝のおせっかい野郎め！ 帰ってくれよ。車イスなんか見たくもねえや。

玲子 わたしも、同じことを考えたわ、もう自分の体が自由にならないことを知った時。

正男 え？ あなたも、交通事故ですか？

玲子 ええ。高校1年の夏休みだったわ。やっと高校生活にも慣れて、さあこれからという時だったの。一時は、“もうどうでもいい、こんな体じゃ生きていても仕方ないんじゃないの？ わたしなんか、いてもいなくてもおんなじなんだわ”って思ったの。

正男 (間)あなたがこの病室に入ってきた時から気になってたんだけど、あなたは、一体どうして

そんなに生き生きとしてるんですか？ 体が動かないっていうのに…。

孝

これだよ。

玲子

そして、これよ。

ナレーション

孝が取り出したのは、玲子の描いた海の絵でした。そして、玲子を取り出したものは、聖書だったのです。

玲子

わたしが病室ですさんだ毎日を送っていた時、看護婦の方が、わたしのところに絵の道具と聖書を持ってきてくれて、わたしにこう言ってくださったの。「人はなんらかのハンディキャップを克服しなければならないの。それが身体障害であることもあるし、学歴や経済力の不足、いろいろあるわ。あなたの場合は手足ね。でも石田さん、手が使えなくても、口は使えるじゃない。口で絵を描いてみたら？ 神様から与えられた体なのよ。精一杯使わなければダメよ」って。

正男

神様が人間をつくったんだったら、なんで人間が苦しみ悩むんですか？ 苦しまないようにつくればよかったのに。悩まないようにすればよかったのに。

玲子

それは、人間がいけなかったの。人間が自分の利益ばかり考えて生活するようになったのは、創り主である神様のもとを離れてしまったからなの。それで、わたしたちの苦しみとか悩みとかのすべてを背負ってくださった方がおられるの。イエス様よ。イエス様がわたしたちのすべての苦しみを取り去ってくださるの。

正男

なんか信じられないなあ。

玲子

初めはそうかもしれないわ。でも、神様の前にすべてを投げ出した時、わたしは生きる喜びを得たの。たとえ手足が不自由でも、それが一体なんだって言うの？

正男

だって、もう昔と同じように走り回ることができないんだよ。

玲子

確かに、以前のように活動することはできないわ。だけど、自分に与えられているものがあるはずよ。

正男

え？ “与えられている”？

玲子

そうよ。自分が失ってしまったものを嘆いてもしょうがないわ。それより、自分に与えられているものを精一杯使ってゆくのよ。わたしね、こうして自分が口を使って絵を描けるなんて夢にも思わなかったわ。でもイエス様がついているってことが心から信じられるようになった時、初めて絵筆を口にくわえる勇気が出たの。筆先が震えないようになるまで1か月かかった。それから小さな一枚の絵を描き上げるまで3か月もかかったの。途中で何度も何度もくじけそうになって、その度にイエス様にすがったわ。やっと下手くそな絵が出来上がって、看護婦さんに「よくやったわね」って言われた時、もう子供みたいに泣きじゃくったわ。「イエス様、ありがとう。イエス様、ありがとう」って。

ナレーション

いつしか正男は、玲子の言葉にじっと聞き入っていました。

玲子

正男さん、努力して、苦しんで一つのことを創り出すって、本当にすばらしいことよ。人間は、神様にそうする力を与えられているのよ。くじけちゃいけないわ。頑張って！——祈っています、あなたのこと。

ナレーション

正男は、玲子の描いた絵と聖書を見つめながら、心の中で「よし、やるぞ」とつぶやいていました——。

<完>